

現場を大切にしつつアジアのモデル・世界のモデルに

大学生協連会長理事 庄司興吉

大学生協連は法人化して 50 年であるが、その元になった全国学校協同組合連合会が発足したのは 1947 年だから、大学生協の歴史は戦後日本の歴史の一環であり、また戦後世界の歴史の一環である。

「平和と民主主義」を掲げて出発した戦後日本は、1960 年代末の大学闘争以降根底的に問われ始め、問題先取りの役を果たしてきた学生運動も 70 年代から 80 年代にかけてほとんど目立たなくなった。90 年代には米ソ冷戦終結の波及で日本の政党構造も変わり、長いあいだ平和と民主主義の先頭に立ってきた日本社会党も消滅した。

そうしたなかで大学生協は増え続け、さまざまな問題を克服して、大学生協連加盟の会員でいうと 10 の事業連合と 6 のインカレコープを含めて 228、組合員数で 148 万余に達している。国際交流を進めるなかで、福利厚生をはじめ大学生活の基礎支えを、これほどの規模の協同組合方式でおこなってきている国はほかにないことも、はっきりしてきた。

学生支援を準政府機関が行っている独仏や、大学が事業としておこなう場合の多いアメリカばかりでなく、独立革命後の混乱や軍事独裁の時期を脱したアジアの国ぐにが今日本の大学生協に注目している。グローバル化のなかで社会発展を図るために、教育機構を仕上げる大学の役割がますます大きくなってきているからである。

戦後日本のもっとも良い遺産を生かしつつ、急変する世界のなかで積極的役割を果たしていくために、日本の大学の使命はますます大きくなってきており、それを支える大学生協の責任もますます大きくなってきている。会員生協のそれぞれの現場をつねに大切にしながらも、連帯組織の内部改革を大きな決意で進めていかなければならない。

懸案となっている共済事業の独立と連合形態の改革を成功させながら、今こそ、日本の大学生協をアジアのモデル・世界のモデルにふさわしいものにしていく時である。

(『コープニュース』2008 年 10 月 10 日)